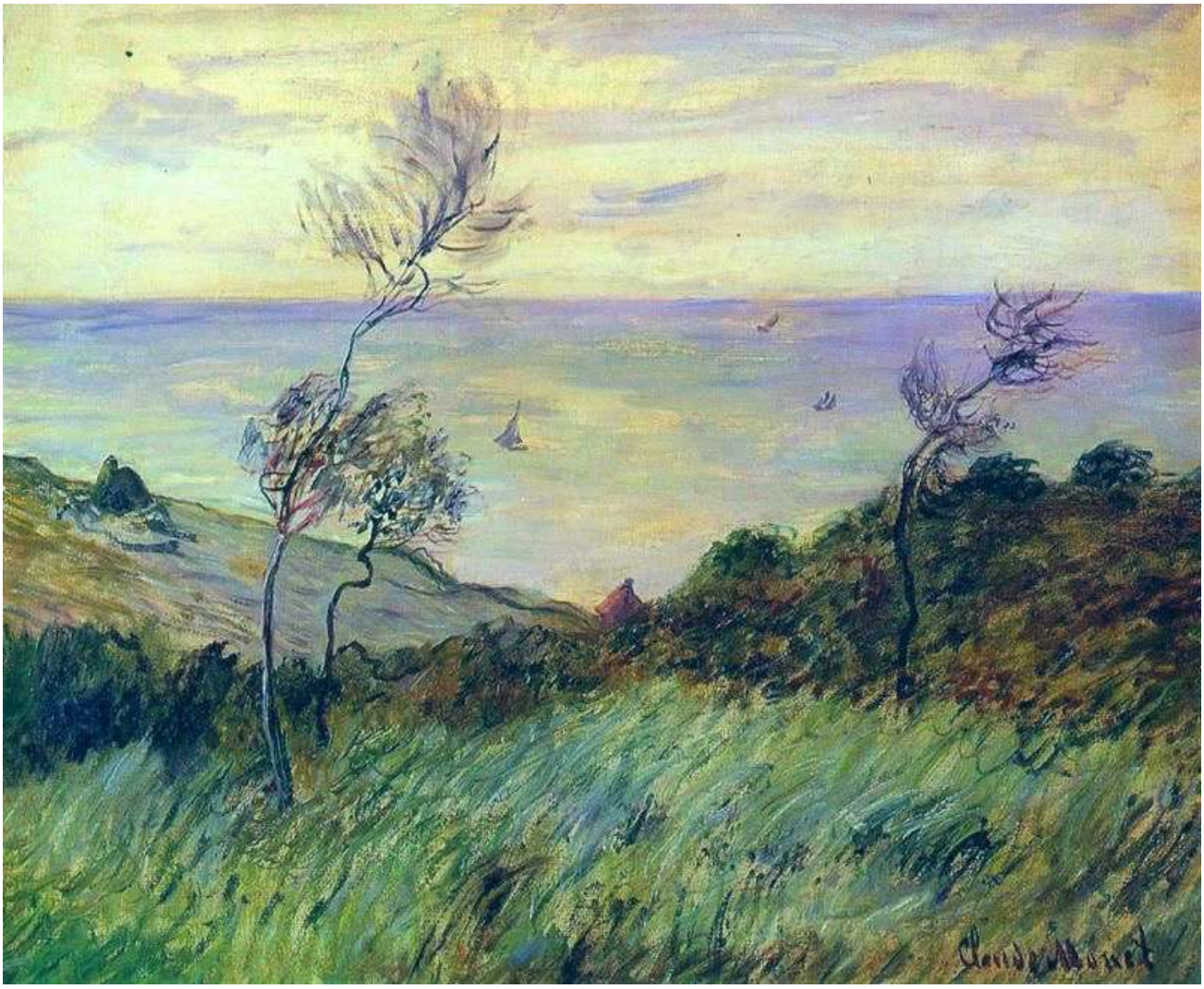
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 179

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

3561. 自らの人生を綴らない眠り続けている人々

3562. 天国への道と不思議な銅像に関する夢

3563. 夢の世界の奥にある夢の世界

3564. エリオット・アイスナーの書籍より

3565. 本日を終えるにあたって

3566. 二つの不思議な夢

3567. 今朝方の夢の持つ意味:宇宙と一体になる意識と天に向かっていく風船

3568. 欧州の片田舎を訪れる夢と"re"と"R"の解釈に関する夢

3569. ユング心理学と教育:無調の曲作りに向けて

3570. 夜に思い出す今朝方の夢:12音技法による無調の曲

3571. 文脈思考能力の欠落

3572. 今朝方の夢

3573. クリスマスイブに見た印象的な夢

3574. ヨギティーに付された言葉と不思議な感覚質を持つ言葉

3575. 晴れ渡るクリスマスイブの午前

3576. 過去の日記からの学びと無調の曲からの学び

3577. クリスマスの朝方に見た夢

3578. 久しぶりにアボカドを食べてみて

3579. 今朝方の夢の続き

3580. クリスマスに思うこと

© YOHEI KATO 2018

3561. 自らの人生を綴らない眠り続けている人々

昨日は、半年ぶりに人と会って話をしたおかげか、自宅に帰ってからも、自分の脳が普段とは違う形で活発に活動しているように思えた。人と会話をすることは、実は脳の活性化に有益なのかもしれないと思う――どのような人と何を話すのかによりけりかもしれないが。

昨夜の就寝前を迎える頃にもまだ脳が活発に動いているようだったので、睡眠の質を心配したが、それは杞憂に終わった。昨夜も良質な睡眠が取れ、今日の活動に向けた気力が十分にある。気力が自分の内側にあるというよりも、気力というものが自分の足元から脳天にある百会のツボに向かって流れており、自分はその流れの通り道に他ならないことがわかってくる。

こうなってくると、気力を高めようとするような発想はもはやなく、気力の流れの通り道に自己を置くだけでいいことがわかってくる。あるいは、自己が気力の通り道に他ならないことに気づくことができれば、もはや自己を通り道に置き直す修正作業すらも必要ないことがわかる。自分が気力という爆発的な活動エネルギーと一体のものであることがわかれば、気力を高めることをする必要がないため、随分と楽だ。

昨夜の就寝前に、一つほど考えが浮かんでいたので、それを枕元の裏紙にメモしておいた。それは、自らの人生を綴ることに関するものだった。画家のエドヴァルド・ムンクに多大な影響を与えた、ノルウェーの著述家ハンス・イェーガーの言葉を改めて思い出していた。イェーガーがムンクに影響を与えた言葉の一つに、「汝自身の人生を綴れ」というものがある。

今から一年半前にノルウェーに旅行に出かけた際に、ムンクが書き残した手紙の断片が収録された書籍を購入し、それをホテルの中で読んでいたことを思い出す。その書籍の中に、上記のイェーガーの言葉があった。ムンクはイェーガーのその言葉を受けて、文字どおり日記や手紙を通じて自らの人生を綴り、そしてムンクは絵画を制作することを通じて自らの人生を綴っていった。自らの人生を綴るというのは、ロバート・キーガンの発達思想と相通じるものがある。

私たちは、発達の歩みのどこかで、自らの人生を綴ることの重要性に気づき、そこから自分の人生を本格的に綴り始める。ここで述べている「自らの人生を綴る」というのは、文字通り日記や手紙を通じて行われるものも含まれているが、それが意味することはより広い。ムンクにとってはその手段

は絵画であったし、作曲家にとっては曲を作ることがその手段の一つになるだろう。自らの人生を綴ることの要諦は、おそらく内側から何かを創造していくことなのだと思う。

形として何かを残し続けていくことが、自らの人生を綴ることの重要な要素になるということを改めて感じる。仮に日記という媒体を活用するとした時に、一日に一つの日記も綴れないような一日は一体どのようなものなのだろうか？と思ってしまう。どのような日にも様々な気づきや自己発見が常に存在しているだろうし、日記として書き留めておくに足る感謝の念を捧げる対象など無数に毎日存在しているだろう。それでは、どうしてこれほどまでに自らの人生を綴ろうとする人が少ないのかについて考えていた。

昨夜ふと思ったのは、人間の発達プロセスは夢を見る前の段階、夢の世界に入っていく段階、夢から覚める段階の三つに大別されるということだった。現代社会の多くの成人は、未だ夢の世界の中にいる。夢の世界の中に完全に浸かりきってしまっているから、ないしは夢を見続けているから何も綴れないのかもしれないと考えていた。何かを綴るためには、夢からわずかばかりでも覚めておく必要がある。

私はここ最近、ほぼ毎日夢日記を綴っているが、それは夢の世界の中にいては綴れない。それと同様に、多くの人たちが自らの人生について何も綴ることができないというのは、結局彼らは夢の世界の中にい続けているからなのだろう。就寝前にそのようなことを考えながら、眠りの世界の中に落ちていった。フローニンゲン：2018/12/22（土）07:04

No.1502: Brightness of the Empty Sky

The weather is not so good today, too. In fact, it started to rain just now. Yet, my dismal feeling vanished into space. Groningen, 10:47, Sunday, 12/23/2018

3562. 天国への道と不思議な銅像に関する夢

時刻は午前七時を迎えた。静かな土曜日の朝が目の前にある。そこには闇があり、闇の中にぽつりと浮かぶ街灯の光がある。その他に見えるものは何もないと言っても過言ではない。そうした光景を眺めながら、今朝方の夢について振り返っていた。夢の中で私は、これから友人の家に向かおうとしていた。

住宅地の道を歩いていると、前方にパトカーが止まっており、二人の警官がパトカーの前に立っている姿が見えた。「何かあったのだろうか？」と思った瞬間に、後ろから誰かが私に話しかけた。見ると、日本の著名な投資家の方だった。その方の表情は険しく、幾分切羽詰まっているかのようにすら思えた。その方は私に近寄ってくるなり、一言述べた。

日本人のある投資家:「天国への道（自由への道）は階段の11段目にあります」

私:「えっ？なんですか？」

日本人のある投資家:「それは11段目にあります。これ、絶対に他の人に言わないでくださいよ。絶対ですよ」

その方は二人の警官の方を一瞥し、それだけ述べて去って行ってしまった。二人の警官が私の方をじっと見つめている。すると、再び誰かが後ろから私に声をかけてきた。見ると、そこには二人組みの見知らぬ男性が立っていた。

二人組みの男性の一人:「すいません。天国への道はどこにありますか？」

私:「えっ？天国への道？あぁ、階段の11段目にありますよ」

先ほど、投資家の方は「絶対に言わないでくださいよ」と述べていたにもかかわらず、私は見知らぬ二人に天国への道の場所についてうっかり話してしまった。一瞬私は「しまった」と思ったが、それを教えたことで何か問題はあるまいと思い、再び道を歩き始めた。

しばらくすると、友人の家に着いた。しかし奇妙なことに、友人の家の入り口が右と左に分かれており、私は何気なく左の玄関から中に入った。二階から友人の声がしたので、二階に上がると、なんと友人（NK）が小さな銅像になっていた。それはコインほどの大きさであった。

部屋の机の上を見ると、その他にも様々な小さな銅像が置かれており、それぞれが話をできるようだった。私は、友人がなぜ小さな銅像になってしまったのかの経緯を聞こうとしたところ、私の背後から声が聞こえた。振り返ると、そこには巨大な銅像が立っていた。その銅像の容姿は、ギリシア神

話の登場人物がモチーフにされており、右側には男性の銅像が、そして左側には女性の銅像があり、それらが一体になっているかのようなものだった。その銅像も話ができるらしく、左側の女性の銅像が怒ったような口調で、小さな銅像になってしまった友人に話しかけてきた。

女性の銅像:「あの銅像はどこにいるのよ！あの銅像がいるからここにやってきたのに」

小さな銅像になってしまった友人:「申し訳ないけど、あの銅像は隣の家にいるよ」

友人はそのように述べた。私はよく事情がつかめなかったが、とりあえずその女性の銅像は、何か目当ての銅像がいたらしく、それは隣の家にいるらしいことだけはわかった。

女性の銅像の隣にひっ付いている男性の銅像は何も喋ることがなかった。二人で一つになった銅像は、くるりと背をこちらに向け、再び階段を降りて行った。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/22(土)07:26

No.1503: A Dark Chameleon

Today's weather looks as if a dark chameleon were wandering about. I suppose that being aware that I'm in Groningen right now represents that I'm conscious of being in the world──or reality. Groningen, 15:25, Sunday, 12/23/2018

3563. 夢の世界の奥にある夢の世界

時刻は午前八時に近づいてきた。目の前に見えるのは、相変わらずの闇である。それに加えて、つい先ほどから雨が降り始めた。予想よりも早い雨の到来だ。雨が窓ガラスにポツポツとぶつかる音が聞こえる。八時を迎えたからか、闇で姿は見えないが、通りを走る車の音が聞こえて来る。

今朝方見ていた夢について再度振り返っている。そういえば、先ほど書き留めた夢以外にも、あと二つほど小さな夢を見ていたことを思い出した。一つ前の夢で出てきた投資家の方とは別の日本人投資家の方と私は知り合いになる機会があった。プール付きの友人の家に遊びに行った時、そのプールサイドにその投資家の方がいた。その方の年齢は私よりも少し上なだけであり、それほど

年齢が離れているわけではない。私たち二人は投資に関する話を含め、その他の話題でもすっかり意気投合してしまった。

随分と話をした後、私たちはプールに入って少しばかり泳いでいた。すると、プールサイドに突然アメリカ人の音楽グループが現れ、音楽を演奏し始めた。その音楽はポップ調のクラシック、ないしはクラシック調のポップのように思えた。私はプールに浸かったまま、彼らの演奏を聴いていた。

すると演奏が一旦終わり、グループのメンバーの二人のアメリカ人が何やらおしゃべりを始めた。一人のメンバーが、マサチューセッツ大学で音楽を学んでいたことを打ち明けると、それにつられる形で、もう一人のメンバーはMITで音楽を学んでいたと述べた。二人が共にマサチューセッツ出身であることを彼らはその時初めて知ったようであり、二人はローカルな話に花を咲かせていた。二人のやり取りをプールの中から眺めていると、そのやり取りが終わり、再び演奏が始まった。

すると、先ほどまではプールの中に一緒に浸かっていた投資家の方が、音楽グループに混じって歌を歌い始めた。その方が嬉しそうに歌を歌いながら私に手招きをし始めたので、私はプールから上がり、私も演奏に加わった。そこで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私はカプセル型の睡眠機器の中にいた。

私の横には何台か同じ機器があり、見ると、高校時代の友人の一人が機器の中に横たわっていた。彼は目を閉じ、仰向けの状態で寝たままで、私に話しかけてきた。友人曰く、その機器の中で眠るとよく寝れるだけではなく、夢の世界をありありと体験することができるらしい。その話を聞いて、私もその機器の中で睡眠を取ることにした。

すると私は、すぐさま夢の世界に入っていった。そこには、私が以前師事していたオットー・ラスキー博士がいた。何やらラスキー博士は、数十年住み続けたマサチューセッツ州を離れ、80歳を超えた今になって日本で生活を始めたようだった。どのような経緯でそのようになったのか不明だが、ラスキー博士はある日本の全寮制高校の学生寮の寮長になったようだった。そこで高校生たちのメンターとしての役割を担っているようだ。私はそこでふと、ラスキー博士が突然日本にやってきたことに対して、「奥さんがお亡くなりになられたのだろうか？」と考えた。その考えが浮かんだとき、私はカプ

セル型の機器によって誘発された夢の世界から再び元の夢の世界に戻ることなく、一気に現実世界で目覚めた。フローニンゲン：2018/12/22（土）08:07

No.1504: An Amusement Park of Drizzle

It became dark when I realized it. Sunday is silently approaching the end. Groningen, 17:41, Sunday, 12/23/2018

3564. エリオット・アイスナーの書籍より

早朝より雨が降り始め、今もそれがひっきりなしに降り続けている。どことなく冷たい雨が地上に降り注いでいる。空を見ると、そこには鬱蒼とした雲があり、冬の寒さはこれからより一層厳しくなっていくことを予感させる。

ここ数日間ずっとスクリャービンのピアノ曲全集を聴いている。その中にはピアノ協奏曲も収められており、いくつかのピアノ協奏曲が極めて美しく、先ほどはしばしそれらに聴き入っていた。

今日は、エリオット・アイスナーの“Reimagining Schools (2005)”の初読を終えた。本書を読みながら、子供たちが芸術教育を通じて何らかの形を生み出していくことに従事することは、後々の世界制作（world-making）につながっていくのではないかと考えさせられた。一言で述べると、世界制作とは世界への関与のことを指す。世界制作を担うためには、意味構築（meaning-making）の力が不可欠であるが、アイスナーの発想は、芸術教育を通じて子供たちが形を生み出し、そしてそれが意味を生み出す力を育んでいくことにつながると考えているように思える。この点には共感するものがある。

芸術教育は、他の教育領域にはない固有の方法で意味構築の力を育み、それが世界に参画していく力を育んでいくことにつながるのではないか。教育哲学者のスザンヌ・ランガーが述べているように、記号制作（symbol-making）は意識の形成に不可欠であり、芸術教育を通じてなされることは、他の教育領域にはない固有の記号を生み出すことを支援することでもある。また、芸術教育は形を生み出すことを促すのみならず、過去の芸術家が残してきた数々の形（記号）から固有の意味を汲み取る力も育んでいく。

本書にはいくつもの洞察溢れる指摘がなされており、それらの文章の横に色々と書き込みをしていた。上述のランガーの指摘と絡めてアイスナーの考えを参考にすると、芸術活動は構造構築(structure-making)の側面を不可避に内包しており、意識の発達は構造的な変容であることを考慮に入れれば、人間発達と芸術教育の接点が見えてくる。また何よりも、芸術作品を鑑賞することや、自ら表現活動に従事することを通じて、この世界が美的経験に溢れたものであることを学ぶことに芸術教育の大きな意義がある、というアイスナーの考え方には大変感銘を受けた。人間発達という観点に基づいて、芸術教育の意義と価値が少しずつ明らかになっていく。フローニンゲン:2018/12/22(土)16:06

3565. 本日を終えるにあたって

時刻は午後の七時半を迎えた。土曜日が、今終わりに向かって静かに動いている。今日は一日中雨が降っていた。そうした中にあって、不思議な安らぎを感じ続けている自分がいた。今もそうした安らぎの感覚を持ち続けている。

今日は作曲実践を旺盛に行い、教育哲学に関する探究を行った。書斎の机の右隅には、あと二冊ほど未読の書籍が置かれており、明日と明後日にかけてそれら二冊を読んでいきたいと思う。それらを読んだ後には、ゴッホの手紙を読んでいくことにしたい。新しい書籍を購入することを控えようと思っていたが、それでも近々、以前ホウマン・ハロウニィ博士から教えていただいた哲学書を購入しようと考えている。購入する書籍は、ハンナ・アレントやハーバート・マクルーゼの哲学書が中心になるだろう。

今日はこれから本日四度目の作曲実践を行う。曲を作りながら理論を学び、理論を学びながら曲を作る。それを徹底していく。本日最後の作曲実践が終われば、そこからさらに就寝までの時間を使って作曲理論の学習をしていく。まとめノートの再読が終わりに差し掛かっており、明日からは転調の技術を優先して復習したい。転調技術の幅を広げるためには、服属7とサブドミナントマイナーに関する復習が必要だろう。そう考えると、まずはそれらの二つの項目をもう一度読み直し、その後に転調について復習する。それと無調の曲の作り方についても復習し、明日か明後日には初めての試みとなるが、無調の短い曲を作ってみたい。

本日はエリオット・アイスナーの書籍を通じて、芸術教育についてまた新たな観点をいくつか得ていた。音楽にせよ、絵画にせよ、芸術作品に触れることは、その作品が開示する世界のある側面に触れることを意味している。芸術作品が開示する世界は、科学教育や言語教育などによっては開示されえない世界であるがゆえに、そこに芸術教育の大きな意義の一つがあるように思う。芸術教育を通じて涵養されるのは、美的リテラシーと呼ばれるような独特の感性及び能力だと言えるかもしれない。それを育み、芸術作品が開示してくれるリアリティの多様な側面を把握していくことは、発達上大きな意味を持つだろう。

明日も芸術教育に関する探究を行い、また新たな気づきや発見を得て、自らの考えを深めていきたい。フローニンゲン:2018/12/22(土)19:56

3566. 二つの不思議な夢

今朝はゆっくりと七時に起床し、七時半を過ぎた頃に一日の活動を始めた。辺りは闇に包まれているが、時折聞こえてくる小鳥の鳴き声がとても優しく響き渡っている。その鳴き声にどこか大きな安堵感を覚える。

今この瞬間は雨が降っていないが、どうやら午後から夜にかけて雨が降るらしい。最高気温・最低気温ともに、この時期のフローニンゲンしてはやはり低くないままなのだが、少しずつ芯から冷えるような寒さを感じることが多くなった。

昨夜からは、再び湯たんぽを使い始めた。不思議なことに、今から三週間前、ないしは一ヶ月ぐらい前に今よりも寒い日々が続いており、その時に湯たんぽを使いながら寝ていた。そこから再び寒さをそれほど感じない日々がやってきて、今再び寒さを感じる日々がやってきたようだ。今日も湯たんぽを使ってお腹と足先を暖めながら就寝しようと思う。

起床して間もないというのに、今日の夜の就寝の仕方について書き留めるのは少し滑稽かもしれないが、自分の内側に言葉の形として現れたものを逐一書き留めておくことは自分にとって大切だ。

今朝方もいくつかの興味深い夢を見ていた。夢の中で私は、大学一年生の時のクラスメートと話をしていた。どこで彼と話をしていたのかは定かではない。強いて述べるならば、それは私が訪れたこ

とのないような場所だった。大きなガラス窓が目の前にあり、私たちはガラス窓に向かって椅子に腰掛けた。

大学時代の友人:「うちの高校の先生がさ、百万人に一人の能力を持ってるんだけど、その動画見た？」

私:「えっ、なんの動画？」

大学時代の友人:「ほら、このあいだ自分のフェイスブックページでシェアしたやつだよ」

私:「ごめん、もうフェイスブックは使ってないんだ。他の手段でその動画見れない？」

大学時代の友人:「そうかぁ、フェイスブック使ってないんだぁ。じゃあ、友人の女性がその先生の功績を解説している短い動画があるから、それをここで見てみよう。その後にすぐ、先生の動画が出てくると思う」

友人はそのように述べ、まずは彼の友人がその先生の功績について解説した短い動画を見た。しかしそれを見ても、その先生の持つ特殊な能力の凄さがいまいちわからなかった。動画が終わると、関連動画表示された。友人曰く、すぐにその先生の動画が表示されるとのことだったが、すぐには出てこなかった。それどころか、私たちは一番下の動画まで遡ってみたが、結局それらしき動画はなかった。一度間違って再生してしまった動画は、その先生と似た様な名前の研究者が、深海研究をしている様子を特集していた。

大学時代の友人:「いや～、こういう研究じゃないんだよね、うちの先生がやっていたのは。宇宙空間で画期的な研究を行ったんだけどなぁ」

その様に友人が述べると、私は宇宙に対して意識が向かい、宇宙が動いている様子がありありと知覚された。もはや友人の声は聞こえなくなり、私の意識は完全に宇宙と一体化しているようだった。そこで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は薄暗く、そして小さなセミナールームにいた。そこでは何やら大学院レベルの数学か物理のレクチャーが行われることになっており、そのレクチャーを務めるのは若い名物教授だった。そのセミナールームには机はなく、椅子だけが密集して

綺麗に並べられていた。およそ、10人×5列分の椅子がそこにあった。私は最前列の左端の椅子に腰掛けた。ふと黒板に目をやると、前のレクチャーの内容がそのまま残っていた。

私は黒板を綺麗にしようと思ったが、すぐにその若い名物教授が部屋に入ってきた。彼は私の目の前にあった荷物置きに自分のカバンを置いた。彼は教授としては若かったが、私よりも年齢は10ぐらい上のように思えた。彼の顔を眺めると、目の周りがとても乾燥している。目の周りの様子から、彼がアトピー性皮膚炎を患っていることがわかった。

レクチャーが始まると、その教授はフランクな形で小噺を始めた。その小噺は意外に面白く、その場は笑いに包まれることが何度もあった。小噺が佳境を迎えるあたりに、一度大きな笑いが部屋中に起こる瞬間があった。すると、私の後ろの席に座っていた人が私の背中をつついてきた。振り返ると、そこには華奢な若いアジア系の女性が座っていて、彼女が私に話しかけてきた。彼女の英語は流暢であったから、彼女が話し始めた途端に、アジア系アメリカ人かと思った。部屋中が笑いに包まれていたため、私は耳をそばだてて、彼女が私に語りかけてくる内容に意識を集中させた。

華奢なアジア系の女性:「あなたこの間、ロンドンの街で風船を飛ばしていたでしょ？私もあの場所にいたのよ」

私:「ロンドンの街で風船？あぁ、確かに先日ロンドンにいた時に、街のイベントには参加してたなぁ。あなたもあの場所にいたの？」

私がそのように述べると、部屋が再度大きな笑いに包まれた。気がつくとレクチャーは終わっており、私はもう部屋の外にいた。

後ろの席の女性が述べていたように、確かに私は先日ロンドンの街にいて、無数の風船が空に飛んでいく様子を眺めていたのは確かだ。だが、私はそれを眺めていただけであって、自分で風船を飛ばしたわけではないことを思い出していたところで、夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/23(日)08:17

No.1505: A Flash of Time

I'll go to bed early today to prepare for tomorrow.

I plan to read the chapter nine in “A Guid to Musical Analysis (1987)” tomorrow. Groningen, 21:27, Sunday, 12/23/2018

3567. 今朝方の夢の持つ意味：宇宙と一体になる意識と天に向かっていく風船

今日は起床時間が遅かったこともあり、早朝に日記を一つ書き終えると、空が少しずつ明るくなり始めてきた。今は午前八時半に近づきつつあり、空がダークブルーに変わりつつある。遠くの方からカラスが鳴く声が聞こえてきた。クリスマス前の日曜日が今始まろうとしている。

今朝方見た夢について、先ほど二つほど書き留めたが、どちらの夢も興味深い。一つ目の夢の中では、自分の意識が宇宙に向かい、そこで宇宙の躍動する光景を眺めていると、自分の意識が完全に宇宙と一体となったものだった。これは言い換えると、観察者としての自己が溶解し、見るものと見られるものとの区別が一切ない意識状態に参入したことの表れだと思う。そして二つ目の夢に関しては、レクチャールームで私に話しかけきた女性の話が印象に残っている。

夢の中の私は少し前にロンドンに行き、ロンドンの大学を見学していた。その大学で研究をするのか、はたまたレクチャーを聞いていたアメリカのその大学に行って研究を続けるのかどうかを検討している時期があった。これはもちろん、夢の中の私であって、今この日記を書いている現実世界の私の話ではない。確かに私は今から半年前にロンドンに一週間ほど滞在していたが、その時は大学を見学していたわけではない。

夢の中の私は、ロンドンの大学とアメリカのどこかの都市の大学を比較していたようだった。結局、夢の中の私はアメリカの大学を選んだがゆえに、あのレクチャールームにいたのだろう。それにしても、私に話しかけてきた若く華奢なアジア人の女性の述べていたことが気になる。私はロンドンの街で風船を飛ばしたわけではないのだが、「風船」というシンボルが何を意味しているのか非常に気になる。

彼女に言われて初めて、確かに自分はロンドンの街にいて、無数の風船が空に舞い上がっていく姿を眺めていたことを思い出していた。風船のシンボルが表す意味が気になったので、少し調べてみたところ、肯定・否定の二つの区分があり、それぞれの区分に対していくかの意味があるようだった。

ロンドンの街で見た、風船が天に向かっていく様子、さらにはそれを見ていた自分の感情、そしてその場にいた私を取り巻くロンドンの街の雰囲気などを総合的に考えてみると、まずは風船というシンボルが肯定的な意味を持っているように思えた。

肯定的な意味と言っても、様々な意味があるらしいが、その中でも、「刷新された希望」「この世界に対する驚きと童心」の二つの意味に響くものがあった。日々、自分の内側にある希望が刷新されていく感覚、そして絶えずこの世界に対して畏怖の念を持ち、さらには童心のような気持ちを持って毎日を過ごしている自分がいることに気づく。そうした日々の生活の有り様が、天に向かう無数の風船として夢の中で現れたのかもしれない。フローニンゲン:2018/12/23(日)08:39

No.1506: A Blissful Morning on Christmas Eve.

A simple phenomenon that it is fine weather today gives me a tremendous amount of happiness. The weather in Groningen on Christmas Eve in 2018 is exquisitely beautiful. A couple of small birds celebrate it, singing a song. Groningen, 09:21, Monday, 12/24/2018

3568. 欧州の片田舎を訪れる夢と"re"と"R"の解釈に関する夢

時刻は午前九時に近づいているが、相変わらずあたりは薄暗い。もう少しすれば明るくなるのだろうが、今日もまた曇りであるから、結局今日も太陽の姿を拝むことはできないだろう。もうここまでくると、もっと抑鬱的な天気が続いてくれと開き直りたくなる。しかし、幸か不幸か、明日からは天気が回復するようであり、クリスマス中は雨が降らないらしい。

もうここ何日もスクリャービンのピアノ曲全集を聴いている。今日もそうしようと思う。スクリャービンの曲に美を見出し、このように一旦深く対象に迫ることができていることを嬉しく思う。新たな感覚が自分の中で育まれ、その感覚の中でも美的感覚を司るものが幾分変容したがゆえに、今このようにしてスクリャービンの音楽に毎日触れているのだろう。

先ほどまで今朝方の夢について振り返っていたが、実際にはまだその他にも夢を見ていたことを思い出す。夢の中で私は、欧州のどこかの国の片田舎に住む日本人女性の家を訪問し、そこでその方の話を聞いていた。その方と私は一切面識はない。私はその方の家に一人で訪問したわけでは

なく、両親と一緒だった。なにやら、父がサポート役になって、母が中心になって行なっているコンサルティングのような仕事があるらしく、私はその単なる付き添いであった。

その方の家はとても落ち着きがありながらも、お洒落な家具がたくさんあった。私たちはリビングルームに案内され、そこに置かれていた大きなテーブルの席に着いた。その方が飲み物を出してくれ、それを飲みながら話が始まった。すると、母が事前に準備した書類に印刷上の不備があったらしく、その方が持っているコピー機を使って資料を印刷し直すことになった。

コピー機の前で父と母がなにやら話をしている姿を遠くで見ながら、私はその方とお茶を飲みながら少し会話をし始めた。しばらくすると、印刷が無事に終わったようであり、両親が再びテーブルに戻ってきたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は何かのワークショップに参加していた。そのワークショップは、私の知り合いのエグゼクティブコーチの方が補佐役を務めていた。ワークショップでファシリテーターを務める方は知り合いではなく、まずはその方がどういう人なのかに興味を持ちながらワークショップに参加していた。

ワークショップが半ばに差し掛かったところで、そのファシリテーターの方がホワイトボードに、“No Where=Now Here”という言葉を書いた。その言葉の意味は、どこにもないこと、あるいはどこでもないということは、即今ここであることを示唆する。言い換えるとそれは、今ここというのはどこか特別な場所にあるのではなく、絶えず私たちの目の前にあり続けることを示唆する言葉である。この言葉を最初に耳にした人にとっては気づきが多いと思われるが、そのワークショップに参加している人であれば、すでにその言葉を過去に聞いたことがあるだろうと思っていた。すると、そのファシリテーターの方もそれを承知のようであり、一言述べた。

ファシリテーターの方:「この言葉の最後の、“re”を取り外して考えてみてください。さて、この“re”が持つ意味は何でしょうか？」

私はその問いかけを受けて、それは“reverse”、すなわち私たちはいついかなる瞬間においても、還るべき帰る場所に自己が向かっていることを示唆しているのではないかと考えた。別の表現で言えば、私たちは今ここで、常に絶対的に、自己を超えた大きな存在としての自分自身に帰還してい

るのではないかと思った。私は、その解釈は直感的に正しいと感じていた。その解釈をワークシートに書いている最中に、エグゼクティブコーチを務める知人の方が私のワークシートを覗き込みながら私に話しかけてきた。

知人の方は、一瞬考え込んだような表情を見せながらも、にこやかな表情をしながら、「その調子でワークシートを記入してください」と述べた。すると、ファシリテーターの方も私に声をかけてきたので、“re”に関する自分なりの解釈を伝えたところ、その方は当惑した表情を浮かべた。どうやら彼が想定していた意味とは違う解釈を自分が行っていたようだ。その方の反応を見た瞬間、このワークショップが極めて胡散臭く、質が低いように思えた。ファシリテーターの方は特にフィードバックのコメントを私にすることはなく、再びホワイトボードの前に戻って行き、ワークショップを続けた。

ファシリテーターの方:「先ほどの“re”については、もう忘れてくださいね。実は、このワークショップではたくさんの“R”が付く理論を参考にしているんですよ～」

ファシリテーターの方は何かお茶を濁すようにそのように述べた。私は少し前にこのワークショップに対して幻滅をしていたが、その言葉によってさらに幻滅感が強まった。だが、“R”という言葉に私はまたしても反応し、「このワークショップには“Integral Theory”も使われているのだろうか？」と考えた。すると、私の横に座っていた参加者の一人が、「私、プログラミングができるんです。それを用いてこのワークショップに貢献したいです！」と大きな声で述べた。

一瞬、その人が突然何を言い出したのかと思ったが、その方はきっと、プログラミング言語のRを活用することができるんだろう、と思った。しかし、R言語でこのワークショップにどうやって貢献するのかが定かではなく、その可能性について考えているところで夢から覚めた。フローニンゲン:2018/12/23(日)09:15

No.1507: Deceitful Happiness

I was thinking about the distinction between authentic happiness and deceitful one. Which happiness are we feeling right now at this moment? Groningen, 14:18, Monday, 12/24/2018

3569. ユング心理学と教育：無調の曲作りに向けて

今日も天気が優れず、午前中の早い段階から雨が降り始めた。しかし、自分の中の鬱蒼とした気分は虚空に消えていくかのようだった。

午前中に、教育哲学者のインナ・セメツキーが編集者を務める“Jung and Educational Theory (2013)”を読み始めた。本書には、様々な教育哲学者の論文が掲載されており、それらはタイトルにあるようにユング心理学と教育学を架橋した内容になっている。本書を読みながら、改めて自分はこうした領域に関心があるのだと思った。やはり自分の関心は秘教的・密教的なものにあるようだ。

シュタイナー教育へ関心を示しているのもその表れだろう。仮に今後、博士課程で何かを探究することを決意した場合、それは秘教的・密教的なものと教育、さらには芸術を関連付けたものになるだろう。そのような予感がする。

上記の書籍を半分ほど読み進める中で、随分と書き込みをすることが多かった。本書のある章の中で、「芸術は子供の王国」という表現がなされていたが、それは「芸術は想像の王国」と置き換えることができるかもしれない。

今朝方の夢の中で、“reverse”に関するシンボルが表れていたが、それは現在の私が子供の頃に訪れた想像の王国へ再び足を運ぼうとしているからなのかもしれない。日々の作曲実践、さらにはデッサンの実践は、想像の王国へ帰還するための手段になっているのかもしれない。

気がづけば、時刻は正午を示している。これから昼食を摂ろうと思う。昼食後には、過去の日記を編集し、その後仮眠を取ってから、作曲実践を行いたい。その際には、無調の曲を作ってみようと思う。12音技法で曲を作ったことは未だかつてないのだが、作曲理論のまとめノートを読み返しながら、順を追って少しずつ曲を作っていく。12音技法についてより詳しく知りたいと思ったため、昨夜の段階でいくつか専門書を探していた。何冊か良さそうな書籍を見つけたため、近々それらを購入したいと思う。今の私は、調性のある音楽を好んでいるが、これから少しずつ無調の曲にも親しんで行き、自分の音楽世界を広げていきたいと思う。自分の音楽世界を広げていくことは、自分の内面世界を豊かにすることも意味している。少しずつ、内面世界を豊かにしていき、自己を涵養していきたい。

無調の曲を作る際には、ハーモニーを工夫することが難しいため、リズムやメロディーに工夫を施していくことを意識する。逆に言えば、無調の曲を作ることは、リズムやメロディーの力を鍛錬する良い機会になると言えるだろう。とりわけ、メロディー以上にリズムで工夫を施すことが求められるようであるから、午後の作曲の際にはリズムを意識する。また、無調の曲を聴く際やその楽譜を眺める際には、リズムの工夫に意識を向けていく。フローニンゲン:2018/12/23(日)12:12

3570. 夜に思い出す今朝方の夢:12音技法による無調の曲

時刻は午後の六時に近づきつつある。気がつけば、辺りが真っ暗闇に包まれていた。

今、日曜日が静かに終わりに向かっている。今日は、教育哲学者のインナ・セメツキーの書籍を読み終え、随分と多く得るものがあった。本書はユング心理学と教育を架橋した内容になっており、今後も何回か読み返すことになるだろう。ここ最近、この世界にあるということへの自覚的な意識が強まっている。ユングが、この世界に真にあるというのは、この世界にあることに対して自覚的である必要がある、という趣旨の言葉を述べていたのを思い出す。

もう一日も終わりに近づいているのだが、今朝方見た夢について再度思い出していた。それは、早朝の日記で書き留めていなかったものである。夢の中で私は、小中高時代の友人と話をしていた。その友人と私はそれほど親しい仲ではなかったが、彼の現在の仕事について話を聞いていた。

どうやら彼は、地元に戻り、地元の進学塾で講師をしているそうだ。週に四日ほどの勤務であり、給料は確かに安いが、自由な時間が比較的多くある、ということを述べていた。彼がどのような経緯で塾の講師になったのかは定かではない。私はふと、確かに彼は週に三日ほどの自由の時間を享受しているようだったが、それは真の意味で自由を享受しているとは思えなかったことを思い出した。つまり、彼は幾分制約に囚われているように思えたし、彼が私に話すときの表情を見ると、今の生活に完全に満足しているわけではなさそうだった。そのような夢を今朝方見ていたことを、夜に向かうこの時間帯に思い出した。

今日は12音技法を用いて無調の曲を試しに作ってみた。今回が初めての試みだったため、曲を作る手順がおぼつかなかったが、短い曲をとりあえず一つ作ることができた。一回の実験的な作曲から、随分と学びがあった。まずは、無調の曲を作る際にはリズムを工夫しなければならないということ

を強く自覚することができた。また、一つ関心を持ったのは、最初に音列を作る際にも何か工夫ができないだろうか、ということである。昨夜もその点について考えており、複雑性科学でよく目にする何らかの数式を用いて、決定論的カオスを曲の中に生み出すことはできないかと考えていた。

そこから、音列を設定する段階で何かしらの数式を活用できないかと考えていた。この点については、今後も考えを温めていきたい。今後も時折無調の曲を作っていこうと思う。その際には、特にこれまで使ったことのない演奏記号やあまり使ってこなかった演奏記号を積極的に使ってみようと思う。リズムへの工夫のみならず、こうした演奏記号の活用にも工夫を施してみようと思う。また、次回無調の曲を作る際には、今回作ることはなかったが和音のように音を重ねることも行ってみようと思う。

無調の曲を今日初めて作ってみたことによって、12音技法を含め、無調の音楽により関心を持つようになった。近々、下記の書籍を購入し、探究を進めていこうと思う。

1. “Serialism: Cambridge Introductions to Music (2008)”

2. “Contemporary Harmony: Romanticism Through the Twelve-Tone Row (2015)”

3. “Twelve-Tone Tonality (1996)”

4. “Serial Composition and Atonality: An Introduction to the Music of Schoenberg, Berg, and Webern (1991)”

5. “Schoenberg’s Serial Odyssey: The Evolution of his Twelve-Tone Method (1993)”

6. “Composition with Twelve Notes Related Only to One Another (1965)”

7. “Style and Idea: Selected Writings (2010)”

8. “Serial Music, Serial Aesthetics: Compositional Theory in Post-War Europe (2005)”

9. “The Structure of Atonal Music (1977)”

10. “Serial Composition (1968)”

フローニンゲン：2018/12/23（日）18:17

3571. 文脈思考能力の欠落

時刻は七時半を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終え、これから一日を締めくくる最後の活動に従事していく。

今日もよく書き、よく作り、よく読む一日であった。特に、日記を書くことと作曲実践を行うことを旺盛に行い、その休憩として書物を読むことを行っていた。このように、書物を読むこと以上に、自分の内側から何かを創造していくことを優先させることが大切だ。もちろん、これからも他者が執筆した書籍を読み続けていく。それは他者との交流の意味を持つ。一方で、書物を読むことを自分で何かを生み出すこと以上に優先させてはならない。

とにかく作り続けること。自分の内側にある言葉の形を待つもの、曲としての形を待つものに形を与えていくこと。それをこれからも最優先にしていく。

夕食を摂り終えてふと、芸術が作り手の固有のリアリティを開示するものであるならば、それにより、自らのリアリティを共有することを通じて、他者や社会への何かしらの関与を果たすことができるかもしれないと考えていた。関与の形は非常に形而上学的なものかもしれず、それは目に見えるものではないかもしれない。しかし、集合的な治癒と変容に資するような芸術というものがありそうであり、それがどのような条件によって生み出されるのかを探究していこうと思う。

相変わらず小雨が降っている。通りを走る車が水しぶきを上げて走り去っていく。明日からは一週間ほど天気が良さそうなので何よりだ。明日は久しぶりに太陽の光を浴びることができるだろう。

夕食を摂りながら、現代社会において、多くの人は何かと科学的な発見事項を盲目的に信じ込む傾向があるが、それは文脈思考能力が脆弱だからではないかと思った。科学的な発見事項というのは、それが実験を伴うものであればなおさら、実験という特殊な文脈によって結果が影響を受ける。もちろん科学者は、あれこれと手を打ちながら、できるだけ現実世界に近い状況設定を実験に持たせようとするが、それが現実世界と完全に一致することはない。つまり、科学的な発見事項は、設定される実験の文脈に大きく依存しており、発見事項が即現実世界に当てはまるとは限らないのである。それにもかかわらず、多くの人たちは科学的な発見事項を即座に信じる傾向がある。そして、これは当然ながら、科学的な発見事項に限らず、他者の意見も含めた多くの事柄に当てはまる。

ある発見事項や意見を鵜呑みにしてしまう思考形態は多分に線形的であり、そこに多様な文脈を考慮するような余地は見られない。

多様な文脈を念頭に置きながら事象を捉えられるようになるのは、発達心理学者のスザンヌ・クック=グロイターやケン・ウィルバーの発達モデルを用いれば、相対主義的段階の思考能力が要求されるが、現代社会の多くの人たちがこうした思考能力を獲得できる日が本当にやってくるのだろうかと疑問に思ってしまう。フローニンゲン：2018/12/23（日）19:50

3572. 今朝方の夢

昨夜はいつもより早く就寝し、今朝は五時半を迎える前に起床した。六時頃から一日の活動を始めた。早朝のこの時間帯においては、クリスマスイブである今日も普段とは何も変わらない雰囲気を持っている。辺りは真っ暗な闇に包まれており、灯る街灯の光が見える。

ここ最近は鬱蒼とした天気が続いていたが、今日は幸いにも晴れるようだ。さらには、ここから一週間は雨が降ることはないらしい。曇りの日も数日ほどあるが、太陽の姿を拝むことのできる日の方が多いことは喜ばしい。

今朝方も随分と印象に残る夢を見たので、忘れないうちに書き留めておきたい。夢の中で私は、野球のグラウンドにいた。そこではプロの試合がなされており、私は一選手としてグラウンドに立っていた。だが、私のポジションはどうも妙だった。というのも、ピッチャーとキャッチャーの間に立つポジションを任されていたからだ。しかも、ピッチャーから2mほど離れた場所に、ピッチャーに向かって立つというポジションだった。

このポジションの役割は不明である。強いてあげるとするならば、バッターからピッチャーの手元が見えないようにし、様々な球種のボールが普段よりも2m近い場所からホームベースにやってくることを可能にすることぐらいだろうか。そのようなポジションを私は任されており、試合の後半まで何事もなかったかのように試合が進行していった。すると試合の終盤に、ピッチャーも疲れてきたのか、制球に乱れが生じ始めた。そこから徐々に、ピッチャーとキャッチャーの間に立っている私に球がぶつかりそうになる場面があった。最終的には、私の足首にものすごい勢いの球がぶつかった。

私はあまりの痛さに倒れそうになったが、痛みをこらえながらその回を凌いだ。その回が終わり、ベンチに戻ると、どうやら足首が骨折しているようだった。ピッチャーを務めていた選手は私に謝り、疲労回復に効くドリンクを手渡してくれた。果たしてこれで骨折の痛みが和らいだり、回復が早まるのか疑問に思ったが、とりあえず差し出されたドリンクを飲んだ。

次の回に、そのピッチャーは、相手チームの代打を務めるホームランバッターに見事なホームランを打たれてしまった。その選手がホームベースを踏んだ瞬間に、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はオランダの自宅にいた。そこは日本で言うところの四階建てのマンションであり、私は現実と同様に、三階に住んでいた。洗濯をしようと思って下の階に降りると、洗濯機がいつもとは異なり、一階に置かれていた。しかもそれは、一階の家のドアの真ん前に置かれていた。

私は洗濯物を洗濯機に入れ、いざスタートボタンを押そうとすると、それがどこにあるのかがわからないぐらいに様々なボタンがあった。結局よくわからなかったが、適当に一つのボタンを押すと洗濯機が動き始めたので、何も問題ないだろうと思った。洗濯機が動き出したのを確認し、部屋に戻ろうとすると、一階の住人の家のドアが開き、中から一人のアジア系の男性が出てきた。私はオランダ人の小柄な男性がそこに住んでいたはずだったのだがと思ったが、あれこれ考える暇もなく、そのアジア系の男性が笑顔で私に話しかけてきた。

彼の英語は一瞬聞き取れなかったが、それは最初の言葉だけであり、私たちはそこで少し立ち話をした。「試験は終わった？」と私が尋ねると、「試験？大学院を卒業してもう何年か経つよ」と彼は笑いながら答えた。その返答を聞いた時、ふと彼の部屋の方を見ると、もう一人誰か男性が部屋にいて、パソコンとにらめっこしながら仕事をしていた。その様子を確認した瞬間に、この夢が終わりを告げた。フローニンゲン：2018/12/24（月）06:26

No.1508: A Naughty Santa Claus

One of the persons whom I most respect is my father. He is very intelligent and “naughty” like a child. When I was a kid, my father must have disguised himself as a Santa Claus on Christmas night. I imagine that the Santa Claus was naughty. Groningen, 21:19, Monday, 12/24/2018

3573. クリスマスイブに見た印象的な夢

2018年のクリスマスイブを迎えた。オランダで迎える三回目のクリスマスだ。

時刻は午前六時半を指しており、辺りは依然として闇に包まれたままだ。早朝に起床した時に、今日もスクリャービンのピアノ曲全集を聴こうと思ったが、Spotifyの画面上に、クリスマス用のクラシック音楽の曲が集められたアルバムが表示されているのを見つけ、今日はその六時間超のアルバムを聴くことにした。明日もそれを聴くかどうかは明日になってから決めようと思う。

今朝方の夢の続きについて引き続き思い出している。夢の中で私は、空中を飛ぶ車の中にいた。眼下には東京の街並みが見えた。ふと私の左を見ると、母方の祖母がその車を運転していた。なぜ祖母が車を運転しているのか、そしてなぜこの車が空を走っているのかは定かではなかったが、私は走る車の窓から、眼下に見える東京の街並みをぼんやりと眺めていた。

すると、車の走る速度が少し上がり、電線が張り巡らされた信号機に差し掛かり、車が急に右折した。その先には、高速道路内のトンネルのような場所があり、トンネル内がオレンジ色の明かりで灯されている。すると、私たちの後ろから、空を飛ぶ別の車が近づいてきて、私たちの車の後ろにつけた。その車の運転手を確認すると、それは小中学校時代の友人だった。

その友人と私は別々の車に乗っていたが、携帯電話などを使わずとも、何かテレパシーのような能力を使ってお互いに会話をすることができた。どうやら友人は、こちらの車の運転手を私の母だと思っているようであり、運転手は私の祖母であることを伝えた。友人はそれを聞いて驚いていたが、実は私も祖母が車を運転していることに対して最初驚いた。

トンネルが終わりに近づいていくと、そこに待っていたのはだだっ広い空間だった。四方が土の壁で覆われており、一見すると、巨大な古代遺跡の中のような雰囲気を持っていた。その空間にたどり着いた瞬間に、祖母も車も突然いなくなり、私だけがその場にいる形になった。壁の四方の隅を見渡すと、そこには何人か人がいるように見えた。私はこのだだっ広い空間を少しばかり宙を浮いて移動した。彼らに話しかけようとした瞬間に、自分の身体が天井の壁まで浮き上がってしまった。天井の壁には、この空間を作った人たちが描いたであろう壁画があった。私はそれを興味深く眺めていると、頭部にチクリとするものがあった。なぜか私の頭部は電球のように黄色く光っており、とて

も小さな虫たちがその光に集まっていた。私はそれらの虫を払いのけながら、ゆっくりと天井から地面に降りていった。

そこで初めて、壁の隅にいた人たちと話をした。聞くところによると、この空間には入口も出口もなく、外に出られないで困っているらしかった。そこで私は、自分の能力を使って壁を破壊して、彼らと一緒にここから脱出しようと思った。私は両手にエネルギーを集め、それを壁に向けて放出すると、土砂と水が混じった土石流の巨大な波が現れ、見事に壁を打ち壊した。

しかし、少々その力が強かったためか、土石流の波は空間の外に広がる畑なども破壊し、さらにはその先にある学園の校舎の一部を破壊してしまったようだった。私は学園の様子が心配であり、そこから再び空を飛んで様子を確認しにいった。幸いにも、畑などの農場に対する被害は最小であり、死傷者は一人もいないようだった。太陽の光が優しく降り注ぐ中、私は飛行を続け、眼下に広がるのどかな風景と、土石流の波が通り過ぎた跡を眺めていた。

学園に向かう途中の畑道に、一人の少女がいた。私は地上に降り、その少女の安否を尋ねた。すると、彼女は怪我はなく、にこやかに手に持っているコインを見せてくれた。それは銅で出来たコインだった。

私はそれを見た瞬間に、記憶が巻き戻され、そういえば先ほどの建物の空間の中で、その銅で出来たコインをその女の子からお守りとしてもらっていたことを思い出した。両手からエネルギーを放出した際に、間違ってそのコインも一緒に外に放出してしまったのかもしれないと思った。

その女の子は、一枚ではなく、何枚ものコインを私に渡してくれており、それら全てが土石流として流れ出て行ってしまったようだった。彼女は今、畑道を通り抜けて行った土石流の残骸から一枚一枚コインを拾っているらしかった。しかしその少女は、それらのコインを私に渡してくれたことを覚えておらず、「どうしてこんな場所にコインが落ちているのかしら」と笑顔で述べていた。どうやら彼女は記憶が消失しているようだった。せっかくお守りとして渡してくれたコインが土石流として流れ出してしまったことを彼女に知られたくなかったため、私は全てのコインを自分で回収することにした。

私はその少女に別れを告げ、再び宙に浮き、そこでまた不思議な力を使って、畑道に散逸したコインを全て宙に浮かせ、遠くに見えた海の方に吹き飛ばした。その後、学園の無事を確認した私は、

© YOHEI KATO 2018

空を飛びながら再度畑道を上空から眺めていると、先ほどの少女が寂しそうな表情をして、小川を掛ける橋の上にいた。私は高度を下げ、地上に降りた。するとその瞬間に、私は彼女と同じ年齢になり、さらには彼女の幼なじみとしてそこにいた。彼女に話しかけてみると、寂しげな表情を浮かべて、彼女が大切にしていたコインがなくなってしまったと言う。すると、私たちの共通の親友である三人の男の子がやってきた。そこで私は、ここにいる全員は中学生だということになんとなく気づいた。先ほどまでは寂しげな表情を浮かべていた彼女も、三人の友人がやってきて、表情が明るくなった。

そろそろ夕暮れ時なので、みんなで一緒に自宅に帰ることにした。私たちはいろいろな話をしながら、絶えず笑いに包まれる形で家に向かっていた。すると、一人の友人が、「そういえば、このあいだみんなで交換したプレゼントの件だけど、最近手持ちの哲学書を売ったから、もっと良いプレゼントが買えるんだけどね」と述べた。それを聞いて、彼女の表情は一段と活き活きし、嬉しさのあまりかぴょんぴょんと跳び跳ねていた。

すると間もなく、彼女は突然走り出した。私たちでも追いつけないぐらいの速度で彼女は走り出し、なんとか追いつこうとして私たちも懸命に走った。すると、私の脳内で、彼女が走る方角から猛スピードでやってくる二台の車があることを知った。私はすぐさま彼女に危ないと伝えようとしたが、見通しの悪いカーブを彼女が左に曲がろうとしたところで、彼女は猛スピードで最初にやってきた車にはねられた。

車にはねられた彼女は、地面に叩きつけられ、その後、その車を猛スピードで追いかけてきた別の車にもはねられた。私は急いで彼女の元に駆けつけ、体を起こすと、なんとかまだ意識があり、話ができるようだった。彼女は一言、「こんなことになってごめんね・・・」と述べて、天に召されていった。その場に駆けつけた友人と共に、私たちは悲嘆に暮れ、そもそもこんな事態になったのは、自分がコインを投げ捨ててしまったからであるし、さらにはあの入口も出口もない古代遺跡のような空間のせいだと嘆きながら思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン：2018/12/24（月）07:11

No.1509: An Affectionate Morning on Christmas

The morning in Groningen on Christmas looks affectionate. Groningen, 09:35, Tuesday, 12/25/2018

3574. ヨギティーに付された言葉と不思議な感覚質を持つ言葉

早朝に、普段と同じように一日分のお茶をまず入れた。ヨギティーのティーバッグにどのような言葉が付されているかを毎朝楽しみにしており、今朝は「他者に共有するために生きる」という言葉が付されていた。その時の自分に強く響く言葉であれば、ティーバッグに付された言葉の紙をノートに貼り付けるようにしている。今日の言葉は妙に自分に響くものがあったため、その言葉が付された紙をノートに貼り付けることにした。

「他者に共有するために生きる」という言葉について、改めていろいろと思いを馳せていた。今日という一日が、他者に何かを共有することにつながる一日になるのかはわからないが、とにかく今日も書を読み、日記を書き、曲を作っていく。

早朝の作曲実践を含め、今日はクリスマスにちなんだ曲を作ってみようと思う。そんな気分だ。もちろん、昨日初めて無調の曲を作ったように、今日も練習として無調の曲を作りたい。その際には、“A Guid to Musical Analysis (1987)”の第9章を参考にして曲を作ろうと思う。

今朝起床した時に、年末年始にかけて、未編集の日記をできるだけ編集していこうと思った。気がつかないうちに、未編集の日記がたまっており、今年の年末年始は日本に一時帰国しないので、この機会に過去の日記を一気に編集しておこうと思う。

今から三日前に、北欧諸国に留学中の東京大学の学生とフローニンゲンで会って話をしていたことについて、先ほどふと思い出していた。彼女はその日、デンマークから17時間ほどバスに揺られる形でフローニンゲンに到着した。彼女と待ち合わせをしていたのは、フローニンゲン大学のメインの図書館の一階にあるスタバの前だった。昨夜ふと思い出していたのは、彼女が第一声に発した言葉だった。

「加藤さん、お会いできて嬉しいです。モサくてすいません」

彼女は膨れ上がったバックパックを持参しており、私はデンマークからの長旅に対して労をねぎらったが、第一声に聞いた「モサい」という言葉がどうも気になっていた。というのも、生まれてこの方一

度もその形容詞を聞いたことがなく、とても興味深く思っていたからである。その言葉を聞いた瞬間は、一瞬その意味を考えたが、それが「もさ苦しい」の短縮形だということはすぐに想像できた。自分にとって「モサい」という言葉の響きはどうも丸みを帯びているように感じられ、少々お気に入りの言葉になってしまったようである。彼女はとても気さくな人柄を持っており、次回どこかで会う機会があり、仮にその時に「モサくてすいません」と彼女が述べてきたら、「たしモサね(確かにモサいね)」と返答してみようと思う。

この一年間ほど作曲実践をしてきたからか、人が話す言葉のリズムに意識が向かうようになっている。おそらくメロディーではなく、言葉のリズムに着目しているのだと思う。彼女が話をしている最中に、いくつか興味深いリズムがあり、それは笑いを誘うようなものだった。私にとってそれは、「そんなリズムがあるのか」と大変勉強になり、今後コミカルな曲を作る時の参考になるかもしれないと思った。そのようなことを昨夜考えており、つい先ほどもそれについて思い出していた。フローニンゲン:2018/12/24(月)07:42

No.1510: A Graceful Flow of Time on Christmas

Lunch time came when I realized it. I'll eat lunch from now and then start afternoon work. Today is Christmas, and it is a special day as well as all of the other days. Groningen, 12:01, Tuesday, 12/25/2018

3575. 晴れ渡るクリスマスイブの午前

クリスマスイブである月曜日の午前中が穏やかに進行していく。今日は本当に素晴らしい天気だ。ここ最近はしばらく太陽の光を見ることがなかったから、今このようにして朝日の光を浴びることができていることに無上の喜びと至福さを感じる。昼食前に買い物に出かける際は、嬉々としてスーパーに向かうことができるだろう。晴れというただそのシンプルな現象が、これほどまでに幸福感をもたらすものであることに改めて驚く。小鳥のさえずりが、この美しい朝の様子を祝福している。

早朝に作曲実践を行った時、バッハの四声のコラールを参考にした。そのタイトルは、“Herzlich lieb hab ich, O herr(主よ、あなたを愛している)”だった。そのドイツ語のタイトルは、偶然ながらクリスマスイブである今日にふさわしい曲のように思えた。

欧米で七年ほど暮らす中で、年末年始はできるだけ日本に一時帰国するようにしていたが、今年はオランダで過ごすことになった。そういえば、ニューヨークに住んでいた年とロサンゼルスに住んでいた年の年末年始も日本に帰らなかったことを思い出した。それは今から四年前のことである。

今年は日本に一時帰国しないため、年末年始にかけては過去の日記を編集する十分な時間を確保することができるだろう。ちょうど今朝から少しずつ未編集の日記を編集することを行い始めた。それはもう今から一年以上前の日記であった。昨年の九月頃の日記を皮切りに、ゆっくりと昨年末から今年の年末にかけての日々を振り返るかのごとく過去の日記を編集していこうと思う。もちろん、今年の年末までの日記をすべて編集することはできないだろうが、できるだけ多くの日記を編集していきたい。

今日はこれから、アーノルド・ショーンバーグやアントン・ウェバーンの曲を参考にして無調の曲を作ってみようと思う。そこでふと、数学上の虚数を用いて作曲ができないかについて考えていた。今すぐにではないが、自分をどこか惹きつける虚数を何かしらの方法を用いて作曲に活用したい。また、フローニンゲン大学で二年間行ってきた研究の中で、ダイナミックシステムに関する様々な方程式を見てきたのであるから、それを活用しようと思う。

書斎の本棚に置かれているダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクスの書籍や論文を眺めながら、それらが宝の持ち腐れになるのを防ぐように、それらを作曲実践の中に活用していきたいと思った。これまで学んできたことが何一つ無駄ではなかったこと、さらにはそれらが自分の現在の試みと必ずどこかで繋がっていることを実感する。これから作る曲の途中、ないしはそれが完成してから近所のスーパーに足を運ぼうと思う。フローニンゲン：2018/12/24（月）11:15

No.1511: On a Sacred Night

A silent night came today, too. Looking at the darkness from the window, I have a meditative feeling and feel the sacredness of this world. Groningen, 17:47, Tuesday, 12/25/2018

3576. 過去の日記からの学びと無調の曲からの学び

時刻は午後の四時を迎えた。今、美しい夕日が西の空に沈んでいく姿を眺めている。その様子は本当に美しい。美しさに心を打たれ、その感動を言葉で人に伝えることは不可能なのだろうか？私はそれは不可能ではないと思いたい。

感動の根源にある何らかの感覚質は、言葉になっても失われることなく人に伝わるはずである。人間が言葉を話すようになったのは何故なのだろうか？当然ながら、その理由は無数にある。そこに様々な科学的な理論を用いて説明を施すことは可能だ。だがそれは今の私にとって不毛な試みである。単純に、人間は感動や幸福を他者に共有するために言葉を話すようになったのではないか、と思うのである。そして、言葉が発達をしていくというのは、まさにより深い感動、より深い幸福を他者に共有するためなのではないだろうか。「あぁ、これが人間発達の要諦か」と私は思った。

遠くの空に沈んでいくオレンジ色の夕日は美しく、手間に見える分厚い雲の塊でさえ美しい。

今日は計画通り、過去の日記を編集し始めた。端的に述べると、日記を書き留めてきて本当に良かったということを実感している。

本日編集をしていたのは、2017年の9月頃の日記であるが、それらの日記を読むと、私がその時に本当に生きていたのだということを目の当たりにした。自分の内側の真実に従って生きている自分の姿を目の当たりにしたと言ってもいいかもしれない。そうした確認を行っただけではなく、その確認によって、私は再び前に向かって一歩を歩み始めたように感じる。そうした現象をもたらしてくれたのは、自分の日記であった。

今このようにして新たな日記を書き留めているのも過去の日記のおかげであり、そうなってくると、日記の執筆は自己を深めていく自己組織化の運動を促してくれることがありありと理解できる。今日もこれからもう少し日記の編集をし、夕食前に本日三回目の作曲実践を行いたい。

今日は昨日に引き続き、実験的に無調の曲を作った。音列を作るところまでは誰にでもできるのだが、そこから先が本当に難しい。作っている最中は、それが曲の体をなしているのか疑問に思っていたが、それなりに試行錯誤して音を一つずつ配置していくと、確かにそれが自分の内側の何かを

表現しているものであることに違いはないことがわかってきた。そして一旦曲を最後まで作り終え、強弱記号や奏法に関する記号などを付加していくと、確かに自分が何らかの規則に基づいてその曲を作ったことが明らかになってくる。無調の曲には調性のある曲にはない表現世界があり、それは私が思っていた以上に深いものであることが見えてくる。これからも少しずつ無調の曲の世界を探究していきたいと思う。そのためには、過去の作曲家の曲を参考にしていくことや、関連書籍を読むことを怠らずに行っていきたいと思う。フローニンゲン:2018/12/24(月)16:16

3577. クリスマスの朝方に見た夢

2018年のクリスマスを迎えた。今日だけが特別な日ではなく、毎日が特別な日であることを改めて思う。

時刻は午前七時に近づきつつある。辺りは静寂さと闇に包まれている。今日は祝日であるから、人々が活動を始めるのはいつもより遅くなるだろう。外は本当に静かであり、そうした静けさに闇が映える。あるいは、闇に静けさが映える、と言った方がいいかもしれない。

そのようなことを思っていると、ふと、闇に対する受け取り方に変化が生まれていることに気づいた。不思議なことに、今目の前に広がる闇が美しく見える。黒一色の世界がなんとも言えない美しさを醸し出していることにハタと気づかされる。気がつけば今年もあと少しとなった。昨日から、過去の日記の編集に力を入れており、今日もそれを行う。

昨日改めて過去の日記を読み返していると、本当に色々な発見があった。昨年の秋にどのようなことを学んでおり、どのような考えを持ちながら日々生きていたのか、さらには当時見ていた夢にはどのようなものがあったかを知る上で、過去の日記を読み返すことは非常に有意義である。そうした意義に加え、さらに重要なことは、過去の日記から新たな感覚や考えが醸成されることだろう。日記は単にその時の自分を映し出すだけではなく、将来の自分の成熟を支えるものである。そのようなことを改めて思った。

クリスマスの今朝も、いくつか印象に残る夢を見ていた。どのような文脈かは忘れてしまったが、私よりもひと回りほど年上の女性と話をしていた時に、その方が元宝塚俳優であるということを知った。一つ目の夢に関して覚えているのはたったそれだけだ。いや、もう少し覚えているのは、その前に、

親友の一人と一緒に大型客船に乗っており、港近くで船から飛び降り、海底に潜っていった場面があった。

その界隈の海はサメが出没することで有名だったが、私たちはあえてそうした海の中に飛び込んでいった。というのも、海底のどこかに私たちの目的地があったからである。海底に潜ってみると、深い海の底の左右に不思議な空間があった。左手に見えたのは、学校の教室のような空間だった。その教室には天井がなく、中の授業風景がよく見えた。

海洋学校の生徒らしき人たちが10人ぐらい席に座っており、先生の話を聞いている。そして右手に見えたのは、一艘の手漕ぎボートが浮かべられた巨大なプールだった。海の中に教室とプールがあることを不思議に思ったが、友人と私は、その教室の先生に相談をし、プールにある手漕ぎボートを使って別の場所に移動することにした。さらに深く海を潜っていったところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は椅子も机もない教室の中にいた。見ると、小中学校時代の友人たちが何人もいて、これから地理の授業があるらしかった。すると、先生が教室に入ってきて授業が始まった。生徒はテキストやノートを広げることはなく、その様子はさながらシュタイナー教育の授業風景であった。

授業が始まると、先生は早速地理に関するクイズを出した。それに生徒一人一人が答えていくことになっており、最初に問題に答えることになったのは私だった。黒板に日本地図が貼られており、黒板の他のスペースに何枚もの写真が貼られていた。先生は一つの写真を指差し、そこには可愛らしい動物が写し出されており、その動物にゆかりのある地名を答えるものである。

私は最初、「奈良」と答えたが、答えは奈良ではないことがなんとなくわかったため、それと似たような、しかし漢字の読み方がいまいちわからない地名を答えた。一応、その読み方は合っており、正解だった。

私の左隣には、小学校のどこかのタイミングで別の学校に転校してしまった女子生徒がいた。次の問題に答えることになっていたのは彼女であり、彼女に力を貸そうとしたが、彼女はそれを断り、自力で答えると主張した。実際に問題が出題されると、彼女はあっさりと問題に解答することができ、

© YOHEI KATO 2018

嬉しそうだった。さらにその左隣にいた生徒に問題が出されたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/25(火)07:12

No.1512: Peacefulness in the Fog

It is foggy in Groningen this morning. Yet, I notice that peacefulness exists in the fog. Groningen, 08:49, Wednesday, 12/26/2018

3578. 久しぶりにアボカドを食べてみて

昨日スーパーに買い物に出かけた時、毎日食べているセロリが店に置かれておらず、在庫もなかったようなので、その代わりのものを店内で探していた。すると、無性にアボカドが食べたくなり、アボカドのセットを購入した。そういえば、アメリカの西海岸で生活をしていた最後の年には、毎日アボカドを食べていたことを思い出した。当時住んでいた場所の近所のスーパーには、オーガニックのアボカドを良心的な値段で購入することができ、毎日一つ食べていたのを思い出す。

昨日は久しぶりにアボカドを購入し、醤油をかけて食べた。その味はとても美味しく、食後に、アボカドの栄養について調べてみた。アボカドの栄養価が高いことについては以前から知っていたが、調べてみると、改めてその栄養価の高さとその効能について驚かされた。昨日は一個丸ごとアボカドを食べたが、調べてみると、一日に摂取するのは半分で良いそうだ。

昨日は丸々一個食べたため、今日はアボカドを食べることをせず、明日残りのアボカドを食べる際には、半分に切って食べようと思う。種の付いている方を半分残し、変色防止のため、反対側の身を全部取り出した後に残った皮を再度元のようにかぶせ、その後サランラップで巻く。そして、次の日に残りを食べる。これからは、ほぼ毎日アボカドを半分食べようと思う。アボカドを食べたくなったというのは、身体がアボカドに含まれる栄養を欲している証拠だろう。

今朝起床した際に、手荒れの様子を確認すると、アボカドを食べたことが皮膚に影響したのか、いつもより肌の調子が良かった。赤みが減り、皮膚の再生機能が高まっているように感じた。アボカドには皮膚や粘膜に働きかける成分が豊富に含まれていると書かれてあったが、まさにその通りのこ

とを早速実感した。さらに調べてみると、アボカドの種にも栄養があるらしく、種を砕いて食べてみようと思う。

普段は夕方にナッツ類を食べており、乾燥させたアボカドの種を砕き、ナッツ類と合わせて食べるか、朝食または昼食として食べてもいいかもしれない。いろいろ調べてみると、アボカドの種を使って、アボカドを栽培することも不可能ではないらしく、いつかそれに挑戦してみたいと思う。

幼少の頃、オレンジの種を鉢に植え、それをあるところまで育ててから、父方の祖父に育ててもらっていたことを懐かしく思い出した。アボカドを本格的に育てるとなると、それは立派な木となり、そこに実をつけることになるらしいので、いつになるかわからないが、庭がある場所に引っ越してからアボカドの栽培を始めようと思う。そのようなことを考えていると、午前八時に近づいてきた。今日も昨日に引き続き、作曲実践と日記の編集を旺盛に進めていく。その他にも、今日は昼食後にオンラインミーティングがあり、クリスマスである今日も充実した一日になるだろう。フローニンゲン：2018/12/25（火）07:47

No.1513: A Passing Lament

Since it has been cloudy all day long today, I haven't seen the sun at all. Today would end without sunshine. Groningen, 15:33, Wednesday, 12/26/2018

3579. 今朝方の夢の続き

今朝方に見た夢をまだ全て書き留めていなかったので、早朝の作曲実践の前に、それらを全て書き留めておく。夢の中で私は、小中学校時代を過ごした社宅にいた。その社宅は、中学校が目と鼻の先にあり、歩いて数分ほど行けてしまう。学校の校庭に入るだけなら、数十秒もかからないような距離だ。

どうやらこれからバスケの練習があるらしいのだが、私は練習に行く前に、昼食を摂ろうと思った。バスケの練習は午前からの練習であり、昼過ぎには終わってしまう。それにもかかわらず昼食を摂ってから練習に行こうとしたのは、その日の練習にはあまり参加したくなかったからだろう。どうやら私

は体調が万全ではないらしく、足に怪我をしているようだった。そのため、練習に行ってもすることはほとんどなく、体育館の隅で調整をするぐらいだろうと思っていた。

家の食卓から屋外のバスケットコートを見ることができる。その日は体育館での室内練習のはずだったが、部活のメンバーたちが外で練習をしている姿が見えた。私は少し早い昼食を摂りながら、彼らの練習風景を眺めていた。思っていた以上に昼食を早く摂り終えたので、億劫ながらも練習に出かけた。

屋外のコートに到着すると、そこには部活の顧問はおらず、生徒だけで練習を行っていた。部活の友人たちは楽しそうにバスケを行っており、彼らの表情を見ていると、私もバスケがしたくなり、怪我のことはすっかり忘れて、練習に参加するためにコートに向かって走って行った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、洋風の作りをした部屋の中にいた。そこには立派な家具がいくつも置かれており、絵画が壁に掛かっていた。私はその部屋の窓際に置かれた立派なソファーに腰掛けていた。そのソファーは三人掛けのものであり、右隣りを見ると、そこには知人の方が座っていた。さらにその右隣にも私の知人が座っていた。

彼ら二人としばらく歓談していたところ、向かって左側にある部屋の扉から、二人の友人が運営する組織で勤めている女性の方がやってきて、「今から睡眠実験をしましょう」と述べた。私たちは一瞬唖然としたが、その女性の話を聞いてみると、その実験が面白そうだったのでやってみることにした。それはとても単純な実験で、今からこの場で仮眠を摂り、その時の脳の状態を測定するというものだった。

脳の状態を測定すると言っても、特殊な機器を使うわけではなく、脳の状態を主観的に観察し、その観察結果を後ほど報告するというものだった。知人の二人は旺盛な知的好奇心を持っている方なので、実験にとても乗り気であった。私もその実験が楽しみだった。その女性の方のガイダンスをすべて聞き、いざ仮眠を取る時を迎えると、一人の知人は目の前のテーブルに伏せる形で、そして私を含めた残りの二人はソファーの上で眠ることにした。私たち三人は、一瞬にして眠りの世界の中に入った。しばらくして夢の世界から元の世界に戻り、仮眠から覚めると、一人の知人の方が仮

眠中の体験について語り始めた。この実験について紹介をした女性の方から質問事項があったのだが、私はその質問事項をきちんと聞き取っておらず、何を聞かれたのか不明だった。

次にもう一人の知人の方が仮眠中の体験を語り、次は私の番となった。二人が語った内容から質問を逆算する形で、私も自分の体験について語り始めた。最初は質問にきちんと答えているのか疑心暗鬼になっていたが、私が語る内容に対して、二人の知人は「面白い！」と言って興味津々に話を聞いていた。二人の様子を見て、私がきちんと質問に答えているらしいことがわかったので、私はさらに細かく仮眠中の体験について語った。

なにやら脳内に網の目が現れ、その区画一つ一つに特定の数字が入るようになっていた、ということについて語っていたのを覚えている。私の右隣に座っていた友人も同様の現象を知覚していたらしく、彼は脳内の網の目の右側の区画の縦一列に、数字の「1」と「2」を多く並べていたことがわかった。彼の話を聞きながら、自分の脳内の網の目に現れた右側の数列はその方のものだったのだとわかった。そうした気づきが得られた瞬間に夢から覚めた。フローニンゲン：2018/12/25（火）08:14

3580. クリスマスに思うこと

2018年のクリスマスを迎えたフローニンゲンは、今日もとても穏やかであった。このように落ち着きのある環境の中で、日々自分のライフワークに打ち込むことができていることを改めて有り難く思う。

2019年を迎えるまであと数日となった。果たして、私は来年はどの国で生活を営んでいるのだろうか。理想は再び米国に戻り、その地で数年間ほど探究生活を過ごしたあとに、スイスの田舎町であるドルナッハで数年を過ごし、その後再びオランダに戻ってくることである。これからの10年はそのような場所で生活できたらと思う。

先ほどもふと思ったが、やはり自分が博士号を取得するのであれば、芸術教育と霊性教育に関するものであり、そのテーマを科学的にではなく、哲学的に研究する形で学位を取得することになるだろう、と考えていた。そうしたテーマについて探究をしていくための場所はこの世界にあまり多く存在していないが、全くないわけではない。すでに候補先となる大学を少しばかり見つけている。

博士課程に進学するのは大学教授になるためではなく、徹頭徹尾、自分の探究をさらに深めていくためであるから、進学を急ぐ必要は全くない。これからの数年間も、この五年間と同様に、日本企業との協働プロジェクトに従事する形で過ごしていくことになるだろう。それと並行する形で、しかるべき時に博士課程に進学すれば良い。

早朝に天気予報を見た限りでは、今日は一日中曇りになると思っていたが、日中に少しばかり太陽の姿を拝むことができた。クリスマスの静かな幸福感がフローニンゲンの街に溢れているように感じる。日々を幸福感を持って過ごすことができていること。それ以上に重要なことはないように思う。

そこでふと、この社会に存在する、真なる幸福と偽なる幸福について考えていた。私たちが今感じている幸福は、どちらの幸福だろうか？この社会は偽りの幸福で埋め尽くされているため、私たちは注意をしなければならない。自らの幸福を自らで見出していくことの大切さを思う。

今日はこれからラヴェルの曲を参考にして作曲実践を行おうと思う。イギリスの書店に注文していたラヴェルの楽譜が昨日届いた。それは私にとって嬉しいクリスマスプレゼントだった。ラヴェルの曲を参考にする際には、短調をベースに曲を作ってみようと思う。

転調を活用するのであれば、転調前と転調後の調が持つ感覚を、自分なりの言葉でまとめておく。その際には、色や形（さらには香りや触感なども）を作曲ノートにメモするようにする。それらのメモはキーワード程度のもので良いだろう。重要なことは、そうした言語化をするか否かであり、それを通じて自分なりの調性感覚を養っていくことである。ラヴェルの曲を参考にした後は、再び過去の日記を編集し、就寝前に時間があれば、12音技法に関する書籍をアマゾンを経由して注文しておきたい。フローニンゲン：2018/12/25（火）16:10